

関係者各位

平成 29 年 3 月 吉日
ジョブコラ担当
15 期生加藤景子

夢甲斐塾ジョブコラ事業の案内

ジョブコラの案内を作成しました。ジョブコラとは、それぞれの仕事を知って、つながりをつくろう！という事業です。今回のジョブコラは夢甲斐塾生以外の参加も歓迎です。広くお声掛けいただけると有り難いです。

※3/15(水)までに出席の返信をお願いします。

記

名 称	ジョブコラ
日 付	2017 年 03 月 18 日(土) 14:00~15:30
場 所	株式会社イチムラボディーショップ 〒400-211 山梨県南アルプス市上今諏訪 779-1 http://ichimura-bodyshop.com/
備 考	参加無料 ※各自スリッパを持参して下さい。 夢甲斐塾 12 期の市村智さんの会社にて、工場見学と市村さんの講話を聞きます。市村さんがどんな生き方をしてきたのか、そしてどんな志を持って新工場を建設し、活動しているのかを現場で体感して下さい！

<タイムスケジュール>

3 月 18 日(土)

13:30 スタッフ集合、セッティング

13:45 受付開始

14:00 工場見学

14:40 市村社長の講話

別紙；上甲塾長のデイリーメッセージを参照下さい。

上甲 晃のテイリーメッセージ

2016.05.09 「業界革命」

「ここは、何屋さん？」と、私は作業場に足を踏み入れて、思わず聞き直してしまった。玄関でスリッパに履き替えて、案内された作業場には、ピカピカに磨き抜かれた車が整然と並んでいる。新車販売のショールームにも見えるので、改めて、聞き直したのである。「自動車の板金・修理業です」と、答が返ってきた。

思わず、「嘘」と叫んでしまった。私の中にある自動車の修理工場と言え、傷付いた車が、生々しい傷跡を見せながら並んでいる。中には埃まみれのままで放置されている車もある。作業している人は、つなぎの服で油まみれだ。冬は冷たい外の風がそのまま作業場に吹き込んでくる。夏は扇風機が熱い空気を送り込む。そうした先入観が打ち破られて、私も一瞬、ドギマギするような混乱に陥った。

工場の一角は、作業場を見学する通路になっている。まるで、ハイテク工場の見学通路のようである。作業場に入る時も、上履きのままだ。ピカピカに磨かれた床に車が並んでいる。新車のショールームでも、たいていの床は、靴のままで歩ける。ここは、修理工場なのに、上履きでなければ歩けない。並んでいる車のタイヤを見た。すべて、ちりや埃ひとつ付いていない。走り出す前の新車のタイヤのようだ。ここでは、修理する車は、例外なく、作業場に運び込む前に、きれいに洗車する。私が最初、ピカピカの新車ではないかと思った車は、すべて、修理しなければならないのである。

山梨県南アルプス市にある株式会社イチムラボディーショップの新しく完成した本社ビルは、日本一美しい自動車修理工場でもある。社長の市村 智氏は、『夢甲斐塾』の出身者だ。「お客様に安心して修理を預けていただける工場。そして、働いている社員が、是非とも家族にも見てほしいと誇りに思える職場を作りたい、そんな市村氏の『志』が、業界の常識を破った美しい工場を生み出したのである。

かつて、市村氏は、「この工場で直るの？」とお客様に不信感を持って尋ねられた時の悔しさが忘れられない。それほど、みすばらしい工場だったのだ。

「この工場だったら大丈夫だ」とお客様に安心して預けてもらえる工場を作りたい、そんな思いを、ずっと胸に秘めてきた。また、若い修理工が集まらないと言われるのは、家族にも見せられないような職場環境の中で、人に見羅られないような姿で働いているからではないかとみ考えた。そんなすべてのイメージを払拭して、輝くような夢のある工場を作りたい。市村氏の『志』の新工場だった。

上甲 晃のテイリーメッセージ

2016.05.10「ボクサー魂」

市村智君は、元ボクサーである。十九歳の時には、ストロー級、ライトフライ級、フライ級で、日本一に輝いたこともある。オリンピック出場をめざして、バルセロナで最後の練習に励んでいた時、父親の病状が悪いので、少しの間だけでも帰国してくれないかと連絡が入った。市村君は、急遽、帰国した。父親の病状は、思った以上に悪かった。バルセロナに帰るどころではない。念願だった、それが結果的には、プロボクサーになる夢を捨てて、家業である自動車修理業の世界に入ることになった。

自動車修理の技術などとは無縁の世界に生きてきたために、突然、父親の手伝いなどできるはずがない。しかし、父親一人でやってきた仕事である。預かっている車を修理しなければならない。ポラロイドカメラで修理個所の写真を撮り、病院で父親に修理の方法を教えてもらって、寝る時間も惜しんで仕事をした。

「本当にボロボロになるほど仕事をした」と、父親の家業を継いだころの辛かった思い出を語る。「深夜に腹の足しになるものを買いに行った時、余りにもみずぼらしい恰好をしていたのでしょう。店員が釣銭を投げ捨てるようにした。それが余りにもむなしく思えて、何とかこの状態から抜け出したいと、がむしやりに頑張った」と言う。

やがて技能の腕も上がってきたので、競技大会に出場した。「九時から五時までの定時だけ仕事をしている他の連中に負けたのでは、寝る時間も惜しんで働いている俺の人生は何だと思いました」。そのハングリー精神のおかげで、技能大会の一位に輝いた。一緒に挑んだ同僚もまた、別の部門で一位に輝いた。ボクシングで鍛えた“なにくそ精神”は、仕事でいかに発揮されたのである。

「ボクシングを通じて、折れない心をはぐくんできた」と市村君は言う。相手の強打を受けた時も、「ここで諦めてたまるものか」と歯をくいしばって、立ち上がった。ある時、ボクシングで判定負けした。コーチが悔しさに号泣した。その涙にぐっとくるものがあった。今度は、うれし涙を流させてやると思って頑張った。市村君は、そんな経験を通じて、人の期待に応える心を養ってきたのである。

今、市村君は、自動車修理業の地位を飛躍的に高めたいと思っている。「人生懸けて、この仕事をやりがいのある素晴らしい仕事にしたい。そして、社会的な評価を高めたい」。そんな市村君の思いがそのまま、新工場となって誕生した。近所の同業者は、「生意気だ」と、相手にしてくれない。しかし、そんなことに心は折れない。